…› 石黒正揮（(株) 三菱総合研究所）

データ立国論

宮田裕章 著
PHP 研究所（2021），990 円（税込），232p., ISBN：978-4-569-84930-0

「データの時代」を生き抜くマインドセットやテクノロジーなどについて指南する書籍は多いが，本書は，目指すべき社会像やその根底をなす理念を提示している点で特徴的であり，データを活用する技術者，研究者にとっても有益な示唆を与える書籍である．

これまでの社会は「最大多数の最大幸福」を実現することを目指す中で，多数から取り残される人々が生じていた．これからの社会は，データを活用することにより，きめ細かく人々に対応することで，「最大“多様”の最大幸福」を実現することが可能になると主張している．現時点でデータはその力を十分に発揮できていない．すなわち，「価値＝貨幣」という経済合理性を至上とする価値観から脱することができず，多様な価値観やライフスタイルの実現には程遠い状況である．データは貨幣のような「所有財」ではなく，「共有財」である．データは，専有するのではなく，共有すればするほど，自分も社会も豊かになるという構造を持っている．たとえば，1 人の医療データはそれだけではあまり価値を生まないが，100 万人の医療データがあつまれば，重要な医学的な知見や治療法につながることがある．

著者は，医療分野がデータ革命の 1 丁目 1 番地として挙げる．アメリカ食品医薬品局により糖尿病治療用アプリとして認可を受けた BlueStar，Google が生命保険分野に進出，平安グッドドクターのアプリを最大限活用した医療保険サービス，Apple がデバイスを売る会社ではなく，人々に健康をもたらした会社になると公言したことなどの動きを挙げている．

厚生労働省から提案されたプラットフォームのコンセプト PeOPLe は，情報共有の主権をデータの提供者一人ひとりにあると規定する．日本では患者の保険医療データ，医療機関，保険者，自治体など分散するデータを PeOPLe に繋げることで，データの価値は大きく高まる可能性がある．

世界におけるデータへのアプローチは異なる．「アメリカ型」は，GAFA をはじめとするテックジャイアントが社会の流れを作る企業主導型である．「EU 型」は，個人の権利を重視する．「中国型」は，社会信用スコアを導入して信用経済を強力に推し進める．日本は，これらの 3 つの類型の長所を組み合わせた「価値共創社会」を目指すべきと主張する．

著者は，データの力で，貨幣以外の価値，たとえば，信用や環境への貢献など多元的な価値を可視化することにより，社会の中で「共有価値（Shared Value）」が生まれ，人々が響き合いながら共に構成する社会を目指すべきとして「データ共鳴社会」を描いている．

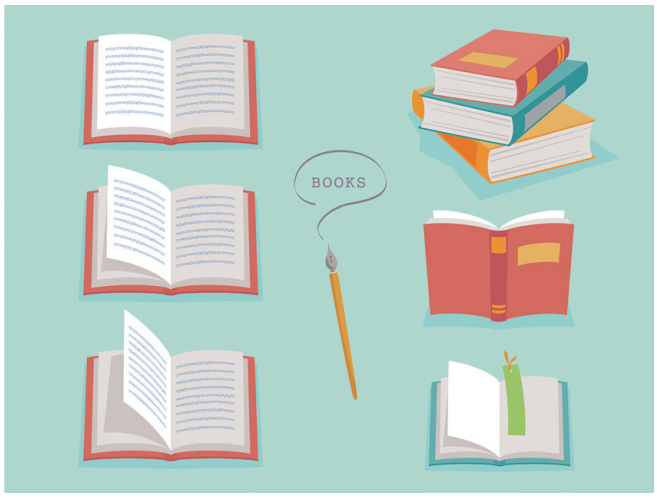
データ共鳴社会のヒントとなる新しい都市づくりの例が挙げられている．たとえば，スペインの人気観光スポットであるバルセロナ市で宣言したスマートシティ構想「ファブ・シティ」は，モノづくりを表す「ファブ」という言葉に象徴されるように，3D プリンタやレーザーカッターなどの街づく

り施設が連携し地域の創造性を高めたり，気温，湿度，騒音，太陽光など環境情報を市民一人ひとりが測定し，インターネット上のサーバにアップロードできるセンサーを開発し，市民との共創によりビッグデータを活用した都市マネジメントの模索がはじめられた．

幸福や豊かさを指す指標である「Well-being」の概念に対して，著者は，個人の行動が世界とつながっている現代では，個人の Well-being が共存し共鳴する「Better Co-Being（ともによりよくあること）」が実現される未来像を描いている．

著者が言う「データ共鳴社会」においては，データを通じて社会における個人や企業の透明性，信頼性，ガバナンスが高められることにより，SDGs（Sustainable Development Goals（持続的な開発目標））の取り組みを過剰に見せる SDGs ウォッシュではなく，本来あるべき社会価値への貢献に自然な形で方向づけられ，そのような企業や個人がトラスト（信頼）を獲得することができると思われる．

（2021 年 12 月 1 日受付）

石黒正揮（正会員）
masa@mri.co.jp

博士（情報科学）．東京大学大学院理学系研究科情報科学専攻修士課程修了．現在，（株）三菱総合研究所サイバーセキュリティ戦略グループ．サイバーセキュリティ，ソフトウェア工学，AI／数理データ解析，リスク評価などを専門とする．日米欧アジアにおけるセキュリティ政策・技術戦略，セキュリティ経済学，デジタル経済学に関する調査コンサルに従事する．